

千葉県における近代理数教育の幕開け

—千葉師範学校旧蔵の明治前期教科書をめぐって—

*山口友樹

YAMAGUCHI Tomoki

要旨：近代教育制度創設期における師範学校の果たした役割をさぐるため、創設期の千葉師範学校の理数教育の特徴を検討した。今回、千葉県立中央図書館の蔵書のうちに千葉師範学校旧蔵の明治初期の教科書を見いだした。そこで本稿では、すでに知られている同校の教則と、今回見いだした同校旧蔵の教科書や、記念誌等に掲載された卒業生らの回想とを比較することで千葉師範学校における教育内容の実像に迫った。さらに、千葉師範学校や、その前身の千葉小学校における数学教育について、沼津兵学校から受けた影響の程度を考察した。

キーワード：日本近代教育史 師範学校教育 明治期教科書 理科教育史 数学教育史

1 はじめに

近代教育制度創設期において、初等教育の確立が急務とされた中で、師範学校の果たした役割は大きい。特に、西洋の近代科学に裏打ちされた理数系科目は、当時、子どもたちはもちろん、教える側の教員にとってもなじみのない目新しい分野であり、近代的な理数科目を教えることのできる教員の養成は喫緊の課題であった。

千葉県では、明治7(1874)年に千葉師範学校が整えられ、同校が県内における近代的な教員養成と初等教育の確立の任を担うこととなった。したがって、千葉県における近代理数教育の受容を考えるにあたっては、千葉師範学校における理数教育の特徴を明らかにすることが重要である。

本県の師範教育については、『千葉県教育史』¹、『千葉県師範学校沿革史』²、『千葉県教育百年史』³などに詳しくまとめられている。これらは、多くの史料引用に基づいているほか、卒業生などの関係者の回想等を補いつつ編さんされている点は貴重である。一方で、概説的な性格は免れ得ず、個々の教則や細かい時期ごとの教育の特徴を十分検討できていない箇所が残されている。

そこで本稿では、これらの先行研究を参照しつつ、『千葉県史料』⁴に残された千葉師範学校の教則類や、千葉県立中央図書館に残された同校にまつわる史料を利用し、千葉師範学校における理数

教育の特徴および、教育内容の実像を明らかにしたい。

はじめに、『千葉県史料』や県立中央図書館に残された千葉師範学校の教則類をもとに、同校の理数教育の特徴についてまとめる。

今回、県立中央図書館の蔵書のうちに、「千葉師範学校」等の蔵書印を持つ明治前期の理数系科目の教科書を31タイトル163冊⁵発見した。そこで、これらの教科書資料のタイトルと前述の教則を比較してみたところ、理数科目については8件の一致をみた。

また、同校の記念誌や千葉県の教育史についてまとめた書籍の中に、卒業生や教員経験者の回想があり、当時の千葉師範学校における教育の実情を知ることができる。これらの史料についても、今回見いだした千葉師範学校旧蔵の教科書資料と比較することで、当時同校では実際にどのように理数科目が教えられていたのか、教育内容の実像に迫ることができるものとする。

最後に、印旛県における旧静岡藩士の活躍を背景として、千葉師範学校やその前身である千葉小学校の数学教育が、沼津兵学校⁶の影響を受けて作り上げられたものであったということを明らかにする。

さて、千葉師範学校の理数教育についての具体的な検討に先立ち、ここで現在の千葉県域におけ

る師範教育のあらましについて簡単にまとめておきたい。

現在の千葉県域における師範教育は、印旛県が明治 5(1872)年 9 月に設置した「印旛官立共立学舎」に始まる⁷。同年 8 月に学制が公布されたのを受け、印旛県令河瀬秀治の命により設置されたものである。「官立共立」というのは、当初同校は「官費」によらず、県吏の俸給の一部を拠出する形で創設されたことによる。同校はやがて流山に移され、校名も「鴻台小学校」と改められた⁸。

明治 6(1873)年 6 月に千葉県が成立すると、翌 7 月には鴻台小学校を新たに県庁所在地となった千葉町に移し、その校名を「千葉小学校」と改めた⁹。

明治 7 年 5 月になると、本格的な小学校教員養成のため、師範学校に改めることとした。ここに「千葉師範学校」が成立する¹⁰。

明治 19(1886)年には師範学校令に基づき「千葉県尋常師範学校」へと、明治 31(1898)年には師範教育令により「千葉県師範学校」へとそれぞれ改められた¹¹。その後、昭和 18(1943)年には官立の「千葉師範学校」に改められた¹²。

昭和 24(1949)年に至り、新制「千葉大学」の母体のひとつとして再編された¹³。

2 教則からみた千葉師範学校の理数教育

創設期の千葉師範学校ではどのような教育が行われていたのか。本章では『千葉県史料』などに残された千葉師範学校の教則をもとに、同校における理数教育の特徴を整理したい。

現在内容を知ることのできる千葉師範学校の初期の教則としては、明治 8(1875)年 1 月のものと、明治 9(1876)年 5 月のものが『千葉県史料』に残されている。『千葉県史料』は、明治初期の行政資料、県から中央政府への照会や県が布達した令達類などが各分野別（学事、駅通など）に編さんされている史料である。また、明治 9 年 5 月の教則は、「千葉師範学校定制」(明治 9 年 5 月 乙第 117 号達)として、「試験法」、「教場規則」、「舎則」などととも千葉師範学校の諸規則集の形で出された。

(1) 明治 8 年 1 月の教則

『千葉県史料』によれば、明治 8 年 1 月の教則¹⁴は、文部省への伺文中に「当県千葉師範学校教則之儀、不都合之^{〔かど〕} 廉^{〔これある〕} モ有^{〔およそ〕} 之ニ付、今般別冊之通改正致度、此段相伺候也」¹⁵とあり、それまでの教則に不都合があったため改正したことがわかる。

その内容をみれば、課程を「五級」に分け、毎級の修業期間を「二ヶ月間」とし、都合「凡^{〔およそ〕} 十ヶ月」の在学期限が定められていた。また、「毎級卒業ノ者ハ試験ヲ経テ昇級」させるという期末試験の規定もあった。

各級の講義については、表 1 のとおり規定されていた。その特徴としては、まず、数学の比率が高い点が目につく。全 150 コマのうち全体の 36% にあたる 54 コマが数学に割かれている。内容も加減乗除から始まり代数や幾何まで至る体系的な構成がなされていたことも読み取れる。それと対照的なのが理科系科目で、第 4 級の 6 コマのみであり、科目も物理と化学の 2 分野のみにとどまっている。以上をみれば、すでに明治 8 年 1 月の時点で千葉師範学校では数学重視の指導が行われていたことがわかる。ほかには、史学の教科書として『十八史略』のような従来からの書物が用いられていた点や、法律学として明治政府が制定した新律綱領・改定律例が教えられていた点は興味深い。本稿は理数教育の特徴を探ることを目的としているため深く立ち入らない。

(2) 明治 9 年 5 月の教則

千葉師範学校は、明治 9 年 5 月に諸規則をまとめ、「千葉師範学校定制」(明治 9 年 5 月 乙第 117 号達)を制定した¹⁶。「千葉師範学校定制」は、「千葉師範学校定制」(以下、便宜上「校則」と表記する)、「千葉師範学校教則」、「試験法」、「教場規則」、「舎則」、「年中休日」、「書籍器械貸渡規則」、「罰則」、「千葉師範学校定制付録」からなる。県立中央図書館には仮とじの冊子体で同名の資料を所蔵している(図 1)¹⁷。同資料には、裏表紙に「千葉師範学校官費生徒渡辺睦五郎」との書込があり、千葉師範学校の生徒が実際に使用したものであることがわかる(図 2)。なお、同資料は千葉県デジタルアーカイブ(菜の花ライブラリー)においてオンライン上で公開されている¹⁸。

表1 千葉師範学校教則（明治8年1月）

科目	教科書・内容	週時数
第5級 (修業期間2ヶ月)		
地理学	日本地理小誌	12
	輿地誌略	
数学	加減乗除～分数	12
習字	楷書	3
質問	該級の要所	3
計		30
第4級 (修業期間2ヶ月)		
物理学	物理階梯	6
	化学入門初編	
史学	校正王代一覽	6
	五洲紀事	
数学	比例諸法	12
習字	行書・草書	3
質問	該級の要所	3
計		3
第3級 (修業期間2ヶ月)		
史学	国史略	12
	万国新史	
数学	利息算～対数用法	12
作文	公私日用ノ文	3
質問	該級の要所	3
計		30

科目	教科書・内容	週時数
第2級 (修業期間2ヶ月)		
史学	十八史略	6
経済学	経済論	3
修身学	修身論	3
数学	代数	12
作文	公私日用ノ文	3
質問	該級の要所	3
計		30
第1級 (修業期間2ヶ月)		
授業法		12
記簿法		3
政治学	真政大意	2
法律学	新律綱領	4
	改定律例	
	万国公法	
数学	代数	6
	幾何	
画学		3
体操		
計		30

（『千葉県史料』近代編3をもとに筆者が作成）



図1 「千葉師範学校定制」（千葉県立中央図書館所蔵、菜の花ライブラリーより引用）

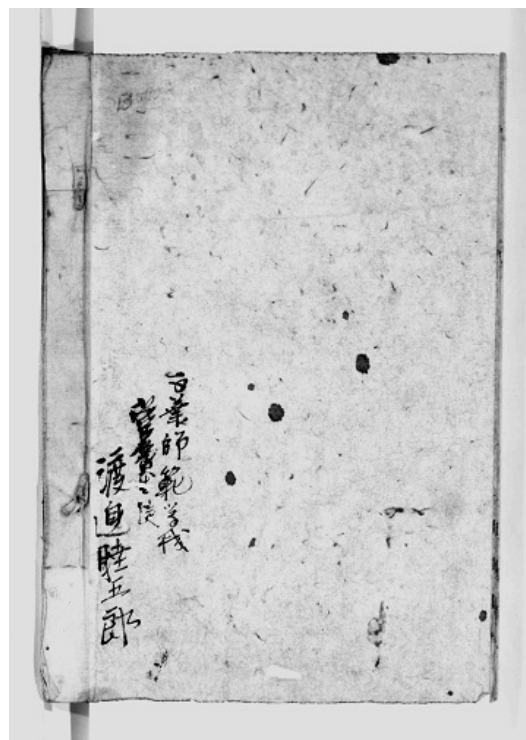


図2 「千葉師範学校定制」裏表紙（千葉県立中央図書館所蔵、菜の花ライブラリーより引用）

「千葉師範学校官費生徒渡辺睦五郎」と墨書されている。

「千葉師範学校定制」の中には教則も含まれているが、それをみると、明治 8 年 1 月の教則とは内容が異なっていることがわかる。以下、内容を検討し、特徴をまとめた上で、明治 8 年 1 月の教則と比較してみたい。

明治 9 年 5 月の教則によれば、修学年限を「六十四週間」とし、課程を「四級」に分け、「毎級十六週間」の修業と定められていた。ただしこの規定は、制定からわずかに約 1 か月半後の明治 9 年 6 月 19 日には、修業年限 2 年、毎級 6 か月間に改められた¹⁹。なお、修業年限については、学力に応じて飛び級なども認められているほか、四級生に満たないものは別に「予備生徒」として「予備教則」を学ばせることとなっていた。1 日の課業は、全員共通の「正課」5 時間、選択科目にあたる「随意教科」1 時間からなり、1 週間に 36 時間と定められていた。毎級の卒業試験が課せられた点は明治 8 年 1 月の教則と同様である。

各級の講義については、表 2 のとおりであった。多くの科目で使用する教科書が記されており、内容や範囲まで細かく規定されているものもある。明治 8 年 1 月の教則と比べ、情報量が多くカリキュラムが精緻化されているといえる。使用教科書は翻訳教科書を基本とし、一部に原典を使用している可能性もある。外国語については「随意教科」の教科として「英学」が設けられているほかは見受けられない。全級を通じて数学が週 12 時間配されており、その分量が多い点は特徴的である。「正課」全級を通じて教育論が講じられ、「文部省雑誌」がその教材として使用されている点は興味深いが、本稿では深く立ち入らない。「正課」3・4 級の下級段階では「地学」（現在の地理学にあたる）や「史学」、「政治大意」など社会科系の諸科目が、1・2 級の上級段階では「物理学」、「化学」、「生理学」などの理科系諸科目が配されているという、系統性が見て取れる点も特徴的である。また、理科系の科目は、明治 8 年 1 月の教則では 2 科目であったのに対し、明治 9 年 5 月の教則では「博物学」、「物理学」、「化学」、「生理学」の 4 科目に増加している。

(3) 小括

以上、明治 8 年 1 月の教則と明治 9 年 5 月の教則をみてわかった千葉師範学校の理数教育の特徴は、一点目に、早くから数学重視の指導が行われていたことである。この由来については、後ほど章を改めて検討する。

二点目は、これに対して理科教育の充実が明治 9 年 5 月の教則改正によって図られ、数学に比べやや出足が遅れたことである。明治 8 年時点では社会科系の諸科目の授業時数が理科系の諸科目よりも顕著に多かったところが、明治 9 年のものでは両者のバランスが図られ、あまり差がなくなっていることが両教則の比較から読み取れる。明治 8 年時点の週時数は社会科系が 45 に対し理科系は 6 であり、明治 9 年は社会科系が 19 に対し理科系は 18 であった。なお修学期間が異なるため、単純な比較はできないが、週時数に学習期間（単位は月）を掛けることでおよそその比較が可能となるだろう。明治 8 年時点で社会科系が 90 に対し理科系は 12、明治 9 年では社会科系が 114 に対し理科系は 108 となり、明治 8 年から明治 9 年の間に理科系諸科目の充実が図られるようになったことがわかる。この時期は、師範学校に専任の校長が置かれるようになるなど、師範教育の拡充が進められていた時期にあたり²⁰、校勢の拡大と軌を一にしていると考えられる。また、特に西洋の近代科学に基づく理数系科目は、当時にあつては目新しい分野であり、教科書をはじめとする教材・教具も発展途上にあつたことも遅れの一因とみられる。

表2 千葉師範学校教則（明治9年5月）

正課

科目	教科書・内容 範囲	週時数
第4級	16週間→6ヶ月(M9.6.19～)	
地学	改正輿地誌略	8
	日本地誌略	
	地図	
史学	国史攬要	
修身学	修身論	1
教育論	学校通論 巻1・2	1
	文部省雑誌	
小学教科	小学入門	2
	小学読本	
	初学地理書	
	日本略史	
	万国史略	
数学	西算新書 諸等算術迄	12
	海軍兵学寮数学教授書	
文章	書牘記事文	6
書法	楷行草書	
体操		
計		30
第3級	16週間→6ヶ月(M9.6.19～)	
地学	輿地史略	8
	地図	
史学	万国通史	
政治大意	立憲政体略	1
	政体論	
教育論	学校通論 巻3・4	1
	文部省雑誌	
小学教科	勸懲雑話	2
	陸軍文庫日本史略	
数学	西算新書 全	12
	海軍兵学寮数学教授書	
	チャンブル氏対数表	
文章	書牘記事文	6
書法	楷行草書	
体操		
計		30

科目	教科書・内容 範囲	週時数
第2級	16週間→6ヶ月(M9.6.19～)	
博物学		8
物理学	登高自卑	
	物理全誌	
経済学	英氏経済論	2
教育論	教導説 巻1	1
	文部省雑誌	
小学教科	具氏博物学	1
	物理階梯	
数学	ロビンソン氏イレメントリ代数術 一次多元方程式迄	12
	幾何用法 上・中・下巻	
	テート氏実用幾何	
文章	記事論説類	6
画術	西画指南	
	図法階梯	
授業法	多級小学教授※1	(5)
体操		
計		30
第1級	16週間→6ヶ月(M9.6.19～)	
物理学		4
化学	登高自卑	
	小学化学書	
	百工応用化学	
生理学	弗氏生理書	2
教育論	教導説 巻2	1
	文部省雑誌	
小学教科	経済要旨	1
	初学人身究理	
数学	ロビンソン氏イレメントリ代数術 比例式迄	12
	幾何用法 付録	
	テート氏実用幾何	
文章	記事論説類	1
画術	西画指南	
	図法階梯	
授業法	多級及ヒ単級小学教授※2	(7.5)
体操		
計		25

※1 但授業法ハ正課時間中ニ於テ五時間ツツ各生徒
交番演習スヘキモノトス

※2 但演習ノ法前ノ如シ

随意教科

科目	教科書・内容 範囲	週時数
読書質問		
第 1 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第四級教科書	6
	日本地誌提要	
	日本志略	
第 2 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第三級教科書	6
	万国新史	
	合衆国小史	
第 3 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第二級教科書	6
	物理日記	
第 4 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第一級教科書	6
	化学日記	
数学質問		
第 1 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第四級正課諸術	6
	筆算訓蒙	
	各種ノ書	
第 2 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第三級正課諸術	6
	筆算訓蒙	
	各種ノ書	
第 3 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第二級正課諸術	6
	各種ノ書	
第 4 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
	第一級正課諸術	6
	各種ノ書	

科目	教科書・内容 範囲	週時数
英学		
第 1 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
綴書	エルソン氏綴書	6
読本	エルソン氏第一読本	
第 2 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
地理	コルネル氏中地理書	6
文法	カッケンホス氏小文典	
第 3 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
文法	カッケンホス氏小文典	6
究理	ノルトン氏究理書	
第 4 期	16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)	
歴史	ハーレー氏万国史	6

予備教則 16 週間→6 ヶ月 (M9. 6. 19～)

科目	教科書・内容 範囲	週時数
読物	勸懲雑話	24
	日本地誌略	
	陸軍文庫日本略史	
	具氏博物学	
	物理階梯	
	小学化学書	
輪講	初学人身究理	6
	小学入門	
	小学読本	
	初学地理書	
	日本略史	
文章	万国史略	6
	書牘記事文	
	算術	
書法	楷行草書	6

(「千葉師範学校定制」をもとに筆者が作成)

3 千葉師範学校旧蔵の明治期教科書について

今回、千葉師範学校について調査を行う中で、県立中央図書館の蔵書のうちに千葉師範学校旧蔵のものとおぼしき明治前期教科書が多数見つかった。調査は同館の蔵書目録の注記情報に基づくもので、同館と国立国会図書館の連携により「国会図書館サーチ」上で確認できる。現在、同館には千葉師範学校の蔵書印をもつ教科書が 78 タイトル 296 点残されていることが国会図書館サーチ上の検索において確認された (令和 4(2022)年 2 月 9 日確認)²¹。このうち、自然科学系のものが 30 タイトル 162 点あった (令和 4 年 2 月 9 日確認)²²。

全体のうちの大きな割合を占めている点が注目される。実際に同館においてそのうちのいくつかの資料を閲覧したところ、注記情報どおりの蔵書印が確認できた。さらに、同館からの情報提供によれば、これらの資料は、確かに当時の千葉県師範学校から寄贈もしくは保管転換により、大正末期から昭和初期に受け入れたものであるという。実際の調査でも「千葉県図書館 昭和 2.12.15」という受入日を示すと思われる印をもつ資料の存在を認めた。

また、調査の過程で、注記情報のない資料のうちに千葉師範学校の蔵書印を認めた例が 1 タイト

ル1冊²³あった。このため、同様に注記漏れのある例がほかにもある可能性はあり、さらなる調査が望まれるところであるが、本稿では現在までに判明しているものの報告にとどめたい。

(1) 資料概要

以上の千葉師範学校旧蔵の明治期教科書のうち、自然科学系のもの31タイトル163点についてま

とめたものが表3である。

これらの明治期教科書資料の中には、同タイトルのうち欠巻があるもの（例えば、7巻組の資料のうち第1巻から第4巻までのみ所蔵など）や、「千葉女子師範学校」の蔵書印をもつ資料と混在しているもの（10巻組の資料のうち第5巻・第6巻のみが千葉師範学校の蔵書印をもつ例など）も

表3 千葉県立中央図書館所蔵の千葉師範学校旧蔵明治期教科書(自然科学系)

No.	書名	著者名	出版者	出版年	所蔵巻数	請求記号※1	備考
1	訓蒙動物学	平坂閔	平坂閔	1881	2	C481/KU38/1	オンラインで公開
2	算法求積通考	内田久命	長門屋亀七	1874	5	W4-6-4/57/	
3	数学教授書	長田清蔵	青山清吉	1873, (1873)	16	W4-6-5/21/ W4-6-5/29/	8巻×2揃
4	算術授業書	遠藤利貞	東京師範学校	1878	3	W4-6-5/59/	
5	筆算題叢	山本正至	広瀬市蔵	1876	8	W5-1-1/20/	
6	筆算摘要	魯縉孫	神津道太郎	1885	5	W5-1-1/39/	「蔵書」印
7	代数新書	西田保明	三浦源助	1877	6	W5-1-1/73/	
8	代数学	山本信実	文部省	1876	10	W5-1-2/1/	
9	改正増補物理階梯	片山淳吉	森屋治兵衛	1876	3	W5-1-2/44/	
10	幾何新論	伯拉德薄理	宮川保全	1876	2	W5-1-2/11/	続巻は(1883)「蔵書」印
11	幾何学原礎	格拉克	浪花屋市蔵	1873	5	W5-1-2/14/	
12	幾何精要	上野継光	上野継光	1877	4	W5-1-2/29/	
13	改正増補士氏物理小学	士都華	牧野善兵衛	1880	3	W5-1-2/78/	
14	格物入門和解	丁躉良	稲田佐兵衛	1870	7	W5-1-2/64/	
15	高等物理新志	平井深励	西探属	1880	4	W5-1-3/10/	
16	物理日記	リッテル	文部省	1874	5	W5-1-3/14/	
17	物理全志	宇田川準一	諸葛信澄	1876	2	W5-1-3/36/	
18	増訂化学訓蒙	石黒忠恵	島村利助	1873	7	W5-1-3/47/	
19	化学日記	リッテル	文部省	1874	6	W5-1-3/54/	
20	新式有機化学	松岡文橘	柳原喜兵衛	1879	2	W5-1-3/63/	
21	新式化学要理	抜格	宮川保全	1879	2	W5-1-3/65/	
22	新式化学	太田雄寧	太田雄寧	1877	10	W5-1-3/68/	
23	植学略解	伊藤謙	文部省	1874	1	W5-1-4/37/	
24	生理提要	ホクスレー	島村利助	1876	12	W5-1-5/18/	
25	改正再版人身生理学	松山誠二	松山誠二	1882	3	W5-1-5/77/	「蔵書」印
26	初学人身窮理後編	松山棟菴	松山棟菴	1880	3	W5-1-5/87/	
27	泰西本草名疏	加禄児百篤 尔春别尔孤		1829	3	W6-1-3/3/	
28	牙氏初学須知	ガリグエー	小林新兵衛	1876	15	W4-6-2/14/	
29	登高自卑	村松良肅	本屋市蔵	1874	4	W4-6-2/33/	
30	登高自卑後編	村松良肅	浪花屋市蔵	1875	4	W4-6-2/37/	
31	羅斯珂氏化学	羅斯珂	東京開成学校	1876	1	KY430/R73/1	注記に情報なし

※1 巻次の若いものを代表的に記載。

(国会図書館サーチ、千葉県立図書館蔵書検索システムをもとに筆者が作成)

あった。後者については、千葉女子師範学校が明治 17(1884)年に千葉師範学校女学部として統合された経緯から²⁴、統合以後引き継がれた蔵書が師範学校蔵書と区別されずに用いられていたらしいことを物語るものである。

なお、資料の背に付けられたラベル(図書館が付けたもの)には、「千葉師範」と朱筆されており、便宜上千葉師範学校の関係資料として整理されていることがわかった(図3)。これは、「千葉女子師範学校」の蔵書印をもつ資料に対してもなされており²⁵、千葉県師範学校から一括で受け入れた資料群を識別するために記入されたものであると思われる。

また、同様に整理された一連の資料には、本文末尾のページに「千葉県図書館 昭和 2.12.15」という受入日を示すと思われる印が押されていることが確認できた(図4)。今回閲覧した資料は全て同じ日付をもち、大正年間に受け入れたと見られる資料は確認できなかった。



図3 『数学教授書』巻1(千葉県立中央図書館所蔵)
背に付けられたラベルに「千葉師範」と朱筆されている。



図4 『幾何新論』巻3-17丁ウ～奥付(千葉県立中央図書館所蔵)

本文末尾のページに「千葉県図書館 昭和 2.12.15」という丸い印が押されている。

(2) 千葉師範学校の蔵書印について

今回の調査で、千葉師範学校の蔵書印は少なくとも3種類のバリエーションがあることがわかった。

一点目は印文が「千葉師範学校」で正方形に近い印形のもの(図5)、二点目は印文が「千葉師範学校」で縦長の印形のもの(図6)、三点目は印文が「千葉師範学校蔵書」で縦長の印形のもの(図7)である。三点目のみが印文が異なっており、蔵書印としてつくられた印である点も特徴的である。三点目のタイプは、『筆算摘要』、『幾何新論』、『人身生理学』の3タイトルのみに限られており、出版年が比較的遅い²⁶ことから、使用開始年代は比較的遅かったものと思われる。

なお、改称後の千葉県尋常師範学校では印形が縦長で「千葉県尋常師範学校蔵書印」と彫られた印を、千葉県師範学校では同じく印形が縦長で「千葉県師範学校蔵書印」と彫られた印を用いたようである²⁷。一方、明治10(1877)年に開校し、明治17年に千葉師範学校に統合された千葉女子師範学校は正方形に近い印形である²⁸。以上、印形や印文の変遷を考慮すれば、あくまで推測であるが、千葉師範学校の蔵書印は一点目、二点目、三点目の順で成立したのではないかと考えるが、出版年等を考慮すると事情はもう少し複雑であったようであり、確定することは困難である。

資料の中には複数の蔵書印を持つものもある。特に、千葉師範学校の前身である「千葉小学校」の印を打ち消すかのように千葉師範学校の印が押された『格物入門和解』の例は興味深い（図 8）。千葉小学校時代に使用されていた図書が千葉師範学校に引き継がれた例があったことを示す重要な

資料である。

また、千葉師範学校の蔵書印の下に「千葉県尋常師範学校附属小学校印」という印が押された『数学教授書』の例も、千葉師範学校旧蔵の図書が千葉県尋常師範学校附属小学校に引き継がれたことを物語っている（図 9）。



図 5 (左) 『物理全志』巻 5, 1 丁才 (千葉県立中央図書館所蔵)

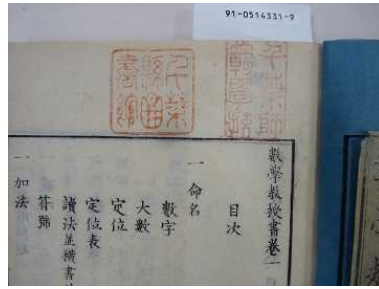


図 6 (中央) 『数学教授書』巻 1, 目次 (千葉県立中央図書館所蔵)

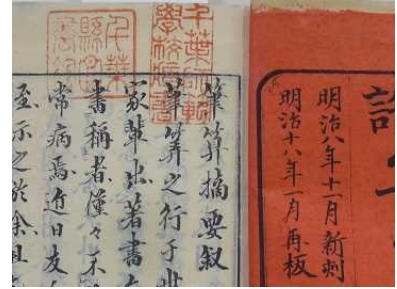


図 7 (右) 『算算摘要』巻 1, 序 1 丁才 (千葉県立中央図書館所蔵)

千葉師範学校の蔵書印 3 種。



図 8 『格物入門和解』〔初編上〕, 董序 1 丁才 (千葉県立中央図書館所蔵)

「千葉小学校印」の上から千葉師範学校の印が押されている。



図 9 『数学教授書』〔巻 1〕, 見返し～目次 (千葉県立中央図書館所蔵)

千葉師範学校の印と、「千葉県尋常師範学校附属小学校印」という印が押されている。

(3) 教則との比較

前章にみた明治 9 年 5 月の「千葉師範学校定制」に照らせば、8 タイトル²⁹の一致をみる。また、『千葉県教育史』の第 2 巻には明治 15 (1882) 年の教則に基づく教科書の一覧表³⁰が記載されており、これと比較すると 5 タイトル³¹が一致している。今回明らかになった千葉師範学校旧蔵教科書資料は、これらの教則の実効性を考える上で重要な資

料であることがわかるだろう。一方で、教則で指定されていない教科書も複数含まれることから、千葉師範学校の関心の傾向をうかがい知ることができる。

(4) 千葉師範学校における蔵書の利用状況

なお、「校則」には、「官費生徒・自費生徒共、教科書、参考書類所持セサル者ハ官書貸渡規則ニ依リ借覽ヲ許スヘシ」³²との定めがあった。また、

「千葉師範学校定制」の中には「書籍・器械貸渡規則」という規則が収められており、これが「校則」にいう「官書貸渡規則」にあたるものと考えられる。同規則の第 1 条には、「教員・生徒共講習必用ノ書ハ借用スルヲ得ヘシ」とあり、授業に必要な図書を貸与する制度が規定されていた。同規則によれば、書籍や器械を借りようとする者は書器貸渡簿へ押印の手続をすること、紛失や破損した場合は弁償することなどが定められていた。また、貸出用の資料の部数が不足している場合は、数人に対して一つの資料を貸渡すこともあるとされた。借用期間の定めは特にないが、帰省の際、毎回の定期試験後の蔵書の調査期間には返却することと規定されていた。第 8 条には「書籍縦覧室ヲ設ケ、各種ノ書籍・新聞・報告・布告書等、縦覧ヲ許スヘシ」とあり、図書の閲覧をおこなうための部屋が設けられることとなっていたことがわかる。なお、「新聞・報告・布告書等」の「縦覧ヲ許ス」という点は、時代（同規則は明治 9 年 5 月制定）を含め自由民権運動との関係性が想起されて興味深い、本稿では深く立ち入らない。

また、千葉師範学校に明治 15 年に入学し同 17 年に卒業した小熊吉蔵³³の回想にも、「教科用書及是に準ずべき必要なる参考書類は各学期の初めに於て机と共に事務所より貸渡された」³⁴と、図書貸与の制度があったことが語られている。

以上のことから、今回県立中央図書館で見つけた千葉師範学校旧蔵の明治期教科書は、図書資料として千葉師範学校が所蔵していたものであると考えるのが妥当であろう。県立中央図書館に残された教科書には、表紙や小口に数字が振られているものが多くあった³⁵。この数字がいつ振られたものか明らかではないが、千葉師範学校時代に図書管理のために振られた可能性も考えられる。

また、表 3 の教科書のなかには教則で指定されていない教科書も多く含まれることは前にも述べたが、これらは小熊の言うところの「是〔教科用書〕に準ずべき必要なる参考書類」として活用されていたものと考えられることができる。

(5) 小括

県立中央図書館の蔵書のうちに見つけた明治期教科書は、千葉師範学校旧蔵のもので、実際に同

校の図書として利用されていたものであるらしいことがわかった。これらの教科書資料は、少なくとも 3 パターンからなる千葉師範学校の蔵書印をもつ。中には複数の蔵書印が押されたものもあり、資料の来歴がわかる点で重要である。

現在県立中央図書館の蔵書として残されている教科書を千葉師範学校の教則と比較すると、明治 9 年のものとは 8 タイトル、明治 15 年のものとは 5 タイトルが一致しており、教則に指定された教科書が実際に使用されたことが確かめられた。また、千葉師範学校には図書貸出しの制度があったことが、同校の規則や卒業生の回想から知られている。今回見いだした千葉師範学校旧蔵の明治期教科書もこの目的で所蔵されたものと考えられ、教則に指定されていない教科書も含まれる点とも整合的である。

4 千葉師範学校の教育の実態

千葉県師範学校が昭和初期にまとめた『千葉県師範学校沿革史』や『創立六十年記念誌』などの記念誌や、千葉県が昭和初期に編さんした『千葉県教育史』には、千葉師範学校の教員や卒業生の回想が複数残されている。本章ではこれらの史料を整理したうえで、前述の千葉師範学校の教則や旧蔵書の内容との比較を試みる。これによって、教則が実際に条文どおり実施されていたか、千葉師範学校で実際にどのような教育が行われていたかを明らかにしたい。

本章では、主に小池民次、谷中国樹、多田房之助の 3 人の回想を中心に検討する。そこで、はじめに 3 人の略歴を紹介したい。

小池民次(1858-1936)は、明治 11(1878)年 1 月に千葉師範学校に入学し、同年 11 月に卒業している。その後、明治 13(1880)年には教員として千葉師範学校に戻り、以来明治 33(1900)年千葉高等女学校に転じるまで 20 年の長きにわたって同校に勤めた。初期の千葉師範学校のことを最もよく知る人物の一人である。師範学校を去った後は、30 年にわたり千葉高等女学校や東金高等女学校で教員や校長として教え、長く本県の中等教育を支えた³⁶。

谷中国樹(1855-1944)は、明治 13 年に千葉師範

学校を卒業すると、県内の小学校の教員や校長を歴任した。明治32(1899)年には故郷の小糸尋常高等小学校の訓導兼校長となり、大正6(1917)年に退職するまで故郷の教育に長く貢献した³⁷。『千葉県師範学校沿革史』及び『千葉県教育史』では、千葉師範学校在学当時のことを詳細に語っている。

多田房之助(1862-1938)は、明治13年に千葉師範学校に入学し、翌明治14(1881)年に同校を卒業している。卒業後は、千葉県内はもとより東京都、栃木県、福島県の小学校や師範学校で教員として教えた。その後、明治33年ころから千葉県教育会の幹部役員として会務を担い、長く本県教育を支えた。昭和7(1932)年に至って同会副会長を退き、顧問に推薦された³⁸。

(1) 師範学校の生徒

小池によれば、生徒は全国から募集したため、奥羽や北国、四国、九州の者もあり、「其の地方地方の話を聴くのも甚だ愉快」であったという³⁹。また、年齢も不揃いで、「髯(ひげづら)面のオヤヂ然としたものもあれば良家の坊ちゃんの如きものもあつた」と振り返る。さらに、相当の学力があれば上位の級に編入や飛び級が許されていた。小池自身、2年の修業年限のところを1年とかわからず卒業している。

谷中によれば、千葉師範学校の生徒は「士族の子弟が多く平民の子弟は割合に少なかった」という⁴⁰。また、千葉師範学校の学資の制度について以下のように振り返っている。

生徒の学資は給費と自費とあり入学試験は給費と自費とによりて斟酌があり自費生は比較的入学が容易で給費生の方は少々難かしくあつた。給費生には食料と月々一元を給され寝具書籍等を貸与された。⁴¹

これら千葉師範学校の学資の制度に関する規定は、前に紹介した明治9年5月の「校則」の中に定められている。谷中がここで「給費生」と称しているのは「校則」にある「官費生徒」のことを指すと思われる⁴²。官費生徒への支給額についての規定を見れば、確かに「日曜日毎ニ雑費トシテ一名金貳拾五銭ヲ給シ、四週間壹円ノ割合」で「其

時々本人ニ相渡スヘシ」とある⁴³。また、「官費生徒・自費生徒共、寝台・夜具、机・腰掛、ランプ、食器等ハ官ヨリ之ヲ貸渡スヘシ」(第4条)、「官費生徒・自費生徒共、教科書、参考書類所持セサル者ハ官書貸渡規則ニ依リ借覧ヲ許スヘシ」(第5条)とあり、明治9年の段階では官費生徒のみならず自費生徒にも「寝具書籍等」の貸与が認められていたようである。谷中が過ごした明治12(1879)年頃には若干の変更があつた可能性もあるが、少なくとも自費・官費(「給費」)の二方式の学資制度が実行されていたことは確実といえよう。

(2) 師範学校の教員

千葉師範学校で教えた教員についてはエピソードも比較的豊富である。谷中は以下のようにまとめている。

当時の先生は東京師範学校出と慶應義塾攻玉社其他の私立学校出とがあつて、中学校兼務の者も相当にあつたが、中には間に合はせの先生もあつた。〔中略〕教科書は訳書が多かつたから原書の読めぬ先生はひける所があつたらしく東京師範高等師範の前身の小学師範出の先生の教室には往々騒「騒かしい」の誤カしいことがあつた。⁴⁴

当時教わつた教員らの修学状況について述べられている。谷中によれば、東京師範学校(筑波大学の前身の一つ)や、私立学校として慶應義塾や攻玉社が有力であつたらしい。千葉師範学校の教員の出身学校については、『千葉県教育史』第2巻でもまとめられており、具体的に個人名とその出身校を確認できる⁴⁵。

また、多田は千葉師範学校の教員について、次のように分析している。

名校長の下に優良の教諭の集まるは当然であるが、千葉は其地、東京に近き為種々の便宜ありて、自ら希望者が多く随つて良教諭も俸給が他に比して高くなくとも喜んで来任したる傾向がある⁴⁶。

多田が「優良の教諭の集まる」と評しているように、谷中や多田が在籍した明治10年代前半の千

葉師範学校には多くの優秀な教員が集まっていた。例えば、初代専任校長を勤めた山田行元や明治 10 年代に長く校長を務めた小杉恒太郎は、その後文部本省の高官となって活躍しているほか、教員でも那珂通世や三宅米吉などは後に東京師範学校や東京女子師範学校で活躍しており、学者としても名高い人物であった。多田は東京に近い千葉ならではの理由から多くの逸材が集まったのではないかと鋭く考察している。

また、校長などが方々から優秀な教員を連れてくることも多くあったようである。例えば三宅の小伝には、「明治十三年 嚮^{〔きまき〕}に新潟学校長たりし小杉恒太郎氏千葉師範学校長の職に在り、博士の学才と人物とに信頼し、三月博士を迎へて千葉師範学校教師に任じたり」⁴⁷とあり、三宅は小杉校長との縁によって千葉師範学校に呼ばれてきたことがわかる。小杉も三宅も慶應義塾出身であり、そうした関係性も影響した可能性もある。実際、三宅は千葉師範学校に招かれた後、慶應義塾の縁によって高嶺秀夫氏に東京師範学校に抜擢されている⁴⁸。当時の教員はお互いの関係性に強く影響されており、学閥のようなものが形成されがちであったようである。

また、谷中は当時の教員について印象的なエピソードを紹介している。

漢学の先生の内には人格といひ学力といひ申分のないものもあった。^{〔しんか〕}併し中には或る生徒が化学書を開いて漢学先生に之はなんと読み其意義はと、うかがひますと先生はウーそれか、ウーそれはソウダツ（曹達）と読むのぢや曹とは魏の曹操の^{〔しやく〕}こと^{〔よこた〕}塑を横へて詩を^{〔ふ〕}賦する一世の雄ぢや、達とは司馬仲達をいふ死せる^{〔しよかつ〕}諸葛生ける仲達を走らせたと云ふあの^{〔しほい〕}司馬懿のことぢやと答へられたといふことでした。これは当時であつては止むを得なかつたことでありましたらう。⁴⁹

化学の教科書に出てくる「曹達」とは、「ソーダ」と読んで主に炭酸ナトリウムを指す語であるが⁵⁰、谷中は専門外の漢学先生が強引に解釈を試みた様子を活写している。従来の教育を受けてきた漢学

先生にとって化学用語はなじみのないものであり、見当違いな返答をすることになってしまったわけである。谷中が「これは当時であつては止むを得なかつたこと」とまとめているように、当時の教員の限界を知ることができる。

(3) 指導内容

千葉師範学校における指導内容について、谷中が詳細な回想を残している。これをもとに、特に理科系科目の指導内容について考えてみたい。やや長いが以下に引用する。

那珂先生のつぎは小杉恒太郎先生が校長で、他の先生方は所謂^{〔たしせいせい〕}多士濟々であつた。その中で特色異彩を放たれたものに就て語れば三宅米吉先生は私学を出づる僅かな^{〔しゆくれい〕}瀟麗なる美少年で、はじめて本校^{〔かいびやく〕}開闢以来無かつた化学の実験をされた。〔中略〕

先生方の教授の仕方は、概ね教室へずーと^{〔はい〕}這入つて講義をし、時鐘が鳴るとずーと帰られるのであつた。カッケンボス氏のナチュラルフィロソフエーの訳書やロスコー氏の化学書などは教科書であつたが之も唯講義をするばかりで、試験などは皆無であつた。生徒の方には会談、輪講などは絶へて無かつた。〔中略〕

教科書には随分意表外なものがあつた。〔中略〕それから^{〔ふつし〕}弗氏生理書があつた。それを手島春治先生が解剖図も標本類もなくて兎も角も生徒に理解するやうに講義をなされた。其手腕には驚かざるを得なかつた。⁵¹

以上の谷中の証言に従えば、理科系科目も当時は講義が主体であつたらしく、このとき初めて化学の実験を導入した三宅米吉の先進性が対比的に述べられている。小池も「当時の師範教育は各科の教員が一定の時間に書物に就いて教授するを主とし理化博物の如きも実験観察と云ふことは極めて稀であつた」⁵²と振り返っており、理科系科目も当時は講義が主体であつた点は一致している。

また、多田は千葉師範学校時代の学びについて、「私は三宅先生の処へ原書で代数を学びに行ったがよく教へて呉れた」⁵³と振り返っており、課外

で学びを深めていたことがわかる。ここでも三宅の名が出てきている点は興味深い。加えて、「代数を学びに行った」とあることから、三宅のもつ知識の範囲の広さがうかがえる。

(4) 教科書

続いて、千葉師範学校で使用された教科書についても谷中の回想をもとに見ていきたい。

教科書は修身論、学校通論、国史攬要^{〔らんよう〕}、万国史略、十八史略、輿地史略^{〔よち〕}、具氏博物書、弗氏生理書、人身窮理^{〔きゆうり〕}、英氏経済書、物理全誌、ロスコー氏化学書などでありました。特に驚くことには弥爾氏代議政体論^{〔ミル〕}も教科書の中にありました。⁵⁴

谷中の回想に出てきた理数系の教科書をまとめれば、「具氏博物書」、「弗氏生理書」、「人身窮理」、「物理全誌」、「ロスコー氏化学書」の5冊を挙げることができる。また、前引文中に「カッケンボス氏のナチュラルフィロソフェーの訳書」とあるのは、『物理全志(誌)』のことを指すものと思われる⁵⁵。これらの書名は、ほとんど明治9年5月の教則にも見ることができ、谷中の証言によって実際に教則どおりこれらの教科書が使用されていたことがわかる。「ロスコー氏化学書」は教則にその名が見えず例外にあたるが、この点は後ほど検討したい。

ここで表3にまとめた千葉師範学校旧蔵書のリストと見比べれば、『人身窮理』、『物理全志』の名を見つけることができる。このことから谷中の回想の确实性を裏付けることができると言えよう。

なお、『弗氏生理書』についても県立中央図書館に所蔵しており、同資料には「千葉女子師範学校」の蔵書印が押されている(図10、図11)。千葉女子師範学校は、明治10年に千葉師範学校構内を区画し建てられ⁵⁶、千葉師範学校校長をはじめとして一般の教員も両校を兼務するなど⁵⁷、千葉師範学校と関係が深い学校であった。当然、師範学校の教則を参考にすることもあったであろうし、創設期のいまだ設備が整わない中であっては教科書や教具を共有することもあったであろう。

したがって、千葉女子師範学校の旧蔵書として

『弗氏生理書』が伝わっているということは、千葉師範学校においても『弗氏生理書』が実際に使用されていた可能性が高いといえる。



図10 『弗氏生理書』[1] (千葉県立中央図書館所蔵)

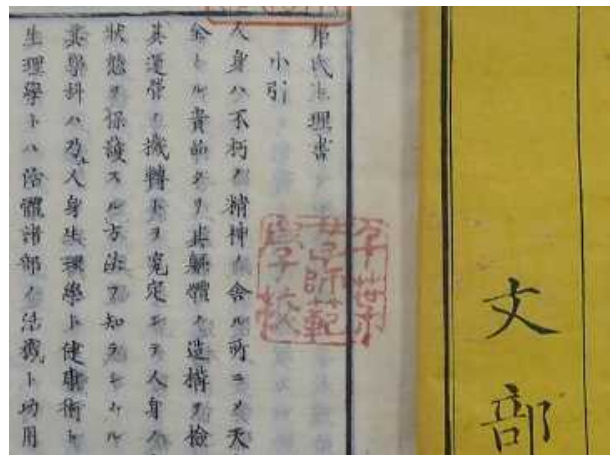


図11 『弗氏生理書』[1], 小引1丁オ (千葉県立中央図書館所蔵) 「千葉女子師範学校」の印が押されている。

(5) ロスコー氏化学書をめぐって

谷中のいう「ロスコー氏化学書」について、筆者ははじめ原著にロスコーの著作が使われた『小学化学書』⁵⁸のことを指すと考えていた。『小学化学書』は明治9年5月の教則にもその書名がみえるほか、「カッケンボス氏のナチュラルフィロソフェーの訳書」などと原著者の名前を把握していたものと考えられたためである。

しかしながら、筆者は県立中央図書館が『羅斯珂^{〔ロスコー〕}

氏化学』という教科書を所蔵していることを発見した (図 12)。そして、同資料のうちに「千葉師範学校」の蔵書印を確認したのである (図 13)。

谷中のいう「ロスコー氏化学書」は、この『羅斯珂氏化学』なる教科書のことを指しているのではなかろうか、という問いが浮上した。以下、同資料についてもう少し詳しく見ていきたい。



図 12 『羅斯珂氏化学』巻 1 (千葉県立中央図書館所蔵)



図 13 『羅斯珂氏化学』巻 1, 標目 (千葉県立中央図書館所蔵) 図 5 と同様の千葉師範学校の印が押されている。

『羅斯珂氏化学』という資料は、今回見つけた千葉師範学校旧蔵の教科書のうちでもやや異質な資料である。まず、他の教科書資料は和装の紐とじ本であるのに対し、『羅斯珂氏化学』は洋装の冊子体で活版印刷がなされている。

次に、県立中央図書館の蔵書目録上に「千葉師範学校」の蔵書印を持つことが注記されておらず、千葉師範学校旧蔵資料として整理されていない⁵⁹。また同資料は、前述の図書館の受入印を持たないことから (図 14)、他の教科書資料のように千葉県師範学校からまとめて受入れられた資料ではないものと考えられる。

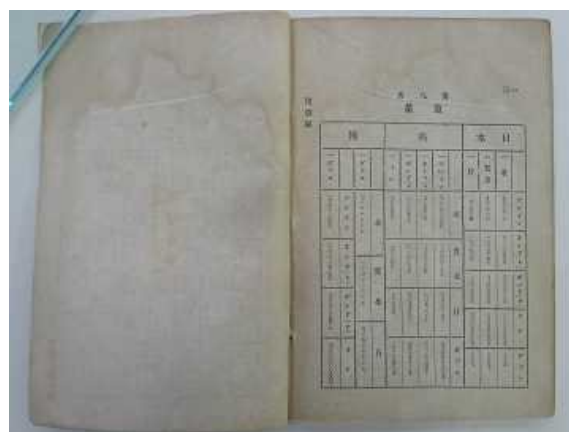


図 14 『羅斯珂氏化学』巻 1, 附録 10 (千葉県立中央図書館所蔵) 図 4 のような受入印は見受けられない。

さて、先ほどの問いに戻りたい。『羅斯珂氏化学』の後見返しには「明治九年五月三十一日版權届済」の印が押されていることから、その発行年月日を知ることができる (図 15)。



図 15 『羅斯珂氏化学』巻 1, 後見返し (千葉県立中央図書館所蔵)

「明治九年五月三十一日版權届済」の印が押されている。

また、東京大学文書館には「羅斯珂氏化学, 度量比較表, 日本有用木材試験表, 出版ノ件」(明治 9 年 3 月 15 日)⁶⁰という史料が残されており出版の経緯を知ることができる。これによって、『羅斯珂氏化学』は明治 9 年 5 月末 (当初計画では 4 月から刊行予定であった) から順次刊行された教科

書であったことがわかる。

千葉師範学校の明治9年の教則は5月1日付けで出されたものであるから、『羅斯珂氏化学』の発刊前に成立したことになる。なお、『千葉県教育史』第2巻に記載された、明治15年の教則に基づく教科書表をみると、「羅斯珂氏化学書」の名が見える⁶¹。明治15年には谷中はすでに卒業してしまっており時期が合わないが、以上を考え合わせると、明治9年5月から明治15年までの間、谷中の在籍した明治12年頃には、『学化学書』に替わって『羅斯珂氏化学』が教科書として使用されていた可能性があるものと思われる。

(6) 小括

『千葉県師範学校沿革史』や『創立六十年記念誌』、『千葉県教育史』には千葉師範学校の教員や卒業生の回想が残されており、当時の学校の様子を知ることのできる貴重な史料である。これらの回想をみると、「千葉師範学校定制」の諸規則や教則などは、おおむねそのとおり実施されていたことがわかった。また、授業形態が講義中心であったことや授業で実験が取り上げられていたことなど、教則や教科書からだけでは充分知ることのできない実際の運用面を知ることができた点は重要である。加えて、県立中央図書館所蔵の千葉師範学校旧蔵教科書と卒業生の回想を比較することで、彼らの回想を裏付け、同じく教則の実効性を確認することができた。

5 千葉師範学校の数学重視と沼津兵学校との関係

千葉師範学校の教則をみると、初期の頃から一貫して数学の授業回数が多いことに気づかされる。明治9年5月の教則では、各級30コマ中12コマ分が数学に当てられているほか、随意科目として英学や読書質問と並び「数学質問」が設けられている。随意科目は6コマ分の配当で、正課に追加で履修することになるから、随意科目で「数学質問」を選択した学生は、週36コマのうち実に18コマ分も数学を学ぶことになっていたのである。このように、千葉師範学校は数学教育に力を注いでいたことがうかがえるが、これはどのような由来があるのだろうか。

(1) 大東重善の回想

このことについて、一つ興味深い史料が残されているので紹介したい。千葉師範学校の前身である千葉小学校の第一回卒業生の一人、大東重善は千葉小学校での学生時代を次のように回想する。

印旛県の方は県令が河瀬秀治君で鴻台学校と云ふ学校を県の中心に設けて教育の事に努力せられたのは、当時中々名高くありました。此の二県〔木更津県と印旛県〕が千葉県となり序下に千葉学校を興し東京より授業法伝習の教師として金地剛、川越真十郎、河目宗俊などいふ先生方を聘し、又数学理科の教師には沼津兵学校出の石川春明、大平、山下など先生方を迎へまして、大に学校の改良進歩を企図されたのであります。学科の内て数学が一番盛んで私なども主に数学を学びに入って居った様な有様でした。⁶²

大東は、印旛木更津各県の教育についてまとめた後、千葉小学校の沿革や教員について触れる。なお、大東は「鴻台学校」および「千葉学校」と称しているが、その内容からみても、それぞれ「鴻台小学校」および「千葉小学校」のことを指していると考えて間違いないだろう。

続いて、数学の教師として沼津兵学校出身者が複数いたことを述べ、千葉小学校での学生生活を「私なども主に数学を学びに入って居った様な有様」とまとめているのである。

すなわち、千葉師範学校における数学重視の教育方針は、同校の前身である千葉小学校から引き継がれたものであると考えられる。

(2) 沼津兵学校出身者

さて、大東の回想において、「沼津兵学校出の石川春明、大平、山下など」という当時の教員の名が挙げられている。樋口雄彦『沼津兵学校の研究』によれば、石川春明は沼津兵学校の第三期資生で、明治14年には会計検査院検査官補をつとめた人物である⁶³。また、石川と同じ沼津兵学校の第三期資生には、大平俊章、山下宣彪という人物がおり⁶⁴、大東の回想にいう「大平、山下」にあたるものと思われる。なお、大平俊章は、明治5

年 11 月に開校した船橋小学校や明治 6 年 1 月開校の真名小学校に印旛県庁から派遣されたとされ⁶⁵、印旛県と関係を持っていたことが知られている⁶⁶。

印旛県では、大平のほかにも教育行政官や教員として沼津兵学校関係者や静岡県土族の族籍をもつ者が複数おり、沼津兵学校・静岡県土族による人脈が形成されていたという⁶⁷。石川ら千葉小学校の沼津兵学校出身教員もこの流れにあったものと理解することができる。なお、沼津兵学校は、教授をつとめた塚本明毅という学者らを中心に、数学教育、特に洋算の教育に力を注ぎ、当時においては屈指の水準を誇っていた⁶⁸。千葉小学校における数学教育重視の方針は、大東の回想にもあったとおり、沼津兵学校出身者の影響によるものであるといえる。

また、樋口によると、明治 6 年 6 月に「印旛県小学校教授方」となった河目俊宗という静岡県土族がいるという⁶⁹。先に大東が「東京より授業法伝習の教師として」招かれたと語った「河目宗俊」という人物は、この「河目俊宗」のことを指すと思われる。ここで、河目俊宗の履歴書を見ると、河目が嘉永 2 年 10 月 (1849 年 12 月) に生まれたこと、明治 6 年 6 月 10 日付けで印旛県学務課雇となったこと、同年 7 月 19 日付けで千葉小学校訓導となったものの翌明治 7 年 3 月 17 日付けで依願退職していることなどを知ることができる⁷⁰。先の樋口論文の記述とあわせて考えれば、明治 6 年 6 月 10 日付けで印旛県学務課雇となったと同時に「印旛県小学校教授方」となったとみて間違いないだろう。

印旛県において沼津兵学校・静岡県土族による人脈が形成されたことは前に述べたが、明治 6 年 2 月以降この状況に変化があった。明治 6 年 2 月、印旛県の教育施策を主導した県令河瀬秀治が群馬県令兼入間県令へと転任した⁷¹のである。すると、6 月頃までの間に 20 名もの県官が河瀬県令につき従って群馬県へ転任したといい、このうち 4 名が沼津兵学校出身者であったという⁷²。たとえば、大平俊章も明治 6 年 4 月付け⁷³で熊谷県の教員養成機関に赴任しているとされる⁷⁴。したがって、明治 6 年 6 月に成立した千葉県においては、沼津

兵学校・静岡県土族人脈があまり引き継がれなかったようである。このためか、確かに千葉師範学校の教員には沼津兵学校出身者は見受けられない。

しかしながら、このことのみをもって千葉師範学校が沼津兵学校の影響を受けていないとは言えない。

(3) 千葉師範学校における沼津兵学校の影響

次に、千葉師範学校で使用された教科書を参考に同校における数学教育の内容を検討し、沼津兵学校から受けた影響の程度を考察してみたい。明治 9 年 5 月の教則において第 1 級・第 2 級 (級は学年のようなもの) の教科書として指定されている『幾何用法』の著者中村六三郎は、沼津兵学校の「測量見習」であったとされる⁷⁵。また、「数学質問」の教科書として指定された『筆算訓蒙』の著者塚本明毅は沼津兵学校の教授であり⁷⁶、同書自体が沼津兵学校で出版されたものである。同書は初期の洋算による数学書としてその評価は高い⁷⁷。また、当時の教科書としても広く使用されていたようである⁷⁸。そのほか、現在県立中央図書館に残された千葉師範学校の蔵書の中にも神津道太郎、宮川保全といった沼津兵学校出身者⁷⁹の訳書を確認することができる⁸⁰。これらの書籍も元は教科書として編さんされたもので、千葉師範学校においては参考図書として利用されていたようである。これをみれば、千葉師範学校における数学の教育内容は、十分沼津兵学校の影響を受けているものと考えられる。

(4) 小括

以上から、千葉師範学校が沼津兵学校から受けた影響についてまとめれば、次のようであったといえる。まず、千葉師範学校の前身となった千葉小学校や鴻台小学校、そしてそれらを設置した印旛県の教育担当者の中には沼津兵学校出身者や静岡県土族が多く存在していた。沼津兵学校で高度な数学教育を受けた彼らは、印旛県における教員養成の場においても数学教育重視の方針を採ったようであることが、関係者の回想から読み取れる。この人事による直接的な影響関係は県令河瀬秀治の転任に伴い薄れていき、千葉師範学校にはあまり引き継がれなかったようである。一方で、教育内容の面での間接的な影響関係は残

存し、千葉師範学校にも引き継がれた。千葉師範学校の教科書として指定されたものの中に沼津兵学校関係者が編さんした教科書が2冊含まれること、図書として使用された書籍の中に沼津兵学校関係者の著書が2冊含まれることなどにその影響を見ることができる。

千葉師範学校の教則の特徴の一つである数学教育の重視の方針は、以上のような歴史的経緯のもと、沼津兵学校の影響によって形成されたものであると考える。

6 むすびに

千葉師範学校の教則から読み取れる同校の理数教育の特徴として、初期から一貫した数学重視の傾向と、理科教育の漸進的な拡充があった。教材・教具が発展途上にあったことも遅れの一因として考慮しなければならないが、両者の対比は興味深い特徴である。また、理科教育の漸進的な拡充と全体的な校勢の拡大と軌を一にしていると思われる点も興味深い。

今回、千葉県立中央図書館の蔵書のうちに千葉師範学校旧蔵の明治期教科書を複数見つけた。これらの教科書資料は千葉師範学校の蔵書印をもち、同校は図書貸出しの制度があったことから、実際に同校の図書として利用されていたものであるらしいことがわかった。また、同校の教則とタイトルが一致する資料が存在し、教則に指定された教科書が実際に使用されたことが確かめられた。

記念誌などに残された千葉師範学校の卒業生らの回想から、教則や教科書からだけでは充分知ることのできない実際の運用面を知ることができた。また、県立中央図書館所蔵の千葉師範学校旧蔵教科書と卒業生の回想を比較することで、彼らの回想を裏付け、同じく教則の実効性を確認することができた。

最後に、千葉師範学校の数学重視の傾向が沼津兵学校の影響を受けていることを検証した。千葉師範学校の前身である千葉小学校や鴻台小学校、印旛県の教育担当者の中には沼津兵学校出身者や静岡県士族が多く存在していた。千葉県成立前後でこれらの人材は他県へ移っていったが、教育内容の面での伝統は引き継がれ、千葉師範学校の数

学重視の傾向が形作られたものと考えられる。

以上、千葉師範学校の理数教育の特徴について、教科書資料や当事者の回想を通じてその実態を知ることができた。千葉県における近代理数教育の受容過程を理解する一助となれば幸いである。一方で、教科書資料の調査は不十分な点も残されているほか、他の師範学校や千葉師範学校と関係の深い千葉中学校との比較によってさらなる検証を要する点などは今後の課題としたい。

凡例

- 一 原則として旧字は新字に改めた。ただし、人名や地名、金額等については旧字を残した場合がある。
- 一 適宜読点、並列点を補った場合がある。
- 一 濁点の有無は原則として史料に従った。
- 一 合字を用いている場合は適宜開いた。
- 一 畳字や繰返しを表す記号は、適宜置き換えた。
- 一 現在小書きとすることが一般的な文字は、読みやすさを考慮し適宜置き換えた。
- 一 [] 内は引用者が加えたものである。

註

- ¹ 千葉県教育会編『千葉県教育史』2, 千葉県教育会(1937)
- ² 千葉師範学校編『千葉師範学校沿革史』千葉師範学校(1934)
- ³ 千葉県教育百年史編さん委員会編『千葉県教育百年史』1, 千葉県教育委員会(1973)
- ⁴ 千葉県史編さん審議会編『千葉県史料』近代編 明治初期3, 千葉県(1970)および、同会編『千葉県史料』近代編 明治初期4, 千葉県(1971)
- ⁵ 今回見いだした教科書資料は、そのほとんどが和装であり、特性上ほとんどが複数巻立ての資料であった。今回の調査は後述のとおり国会図書館サーチを利用した手法を用いており、タイトルの整理は国会図書館サーチに準拠する形をとった。
- ⁶ 静岡藩(藩主は移封された徳川氏)が明治元(1868)年に設立した陸軍将校養成学校。廃藩置県後の明治4(1871)年に兵部省へ移管され、明治5(1872)年には東京の陸軍兵学寮に統合された。西周や赤松則良、塚本明毅らが教授として名を連ねるなど、多数の優秀な旧幕臣が関与した。軍事に不可欠な測量技術習得のため西洋式の数学が教授され、沼津版と呼ばれたその教科書はその後の学校

- 教育にも影響を与えた。樋口雄彦『沼津兵学校の研究』、吉川弘文館(2007)に詳しい。
- ⁷ 前掲『千葉県教育百年史』1, p. 261
- ⁸ 同前。
- ⁹ 前掲『千葉県教育百年史』1, p. 263
- ¹⁰ 前掲『千葉県教育百年史』1, p. 265
- ¹¹ 前掲『千葉県教育百年史』1, p. 745 および、同書 pp. 1117-1118 を参考にした。
- ¹² 千葉県教育百年史編さん委員会編『千葉県教育百年史』2, 千葉県教育委員会(1974), p. 1144-1145 を参考にした。
- ¹³ 千葉県史料研究財団『千葉県の歴史』通史編 近現代3, 千葉県(2009), p. 257
- ¹⁴ 前掲『千葉県史料』近代編 明治初期3, pp. 487-489 以下, 明治8年の教則についてはこれによった。
- ¹⁵ 前掲『千葉県史料』近代編 明治初期3, p. 487
- ¹⁶ 前掲『千葉県史料』近代編 明治初期4, pp. 338-361
- ¹⁷ 「千葉師範学校定制」明治9年5月 乙第117号達(千葉県立中央図書館所蔵, 請求記号:C377/C42/2)。以下, 明治9年の教則については, 基本的これにより, 場合によって前掲註14を参考にした。
- ¹⁸ 「千葉師範学校定制」(菜の花ライブラリー) http://e-library.gprime.jp/lib_pref_chiba/da/detail?tilcod=0000000014-CHB601674 (令和4年2月9日閲覧)。なお, 図1, 図2は菜の花ライブラリーで公開されている画像によった。
- ¹⁹ 前掲『千葉県史料』近代編 明治初期4, p. 380
- ²⁰ 前掲『千葉県師範学校沿革史』, pp. 18-19
- ²¹ 国会図書館サーチにおいて, 「印記: 千葉師範学校」と検索した。
- ²² 前掲註21の条件に加え, 「4. 自然科学」の絞り込み条件を指定し, 検索した。
- ²³ 同タイトルは全10冊からなり, 第1巻は千葉師範学校の蔵書印をもつが, 他の9冊は「千葉女子師範学校」の蔵書印をもつ。
- ²⁴ 前掲『千葉県教育百年史』1, pp. 498-499
- ²⁵ 後述の, 4-(4)および図10も参照。
- ²⁶ 「幾何新論」は明治9年発行であるが, 続巻が明治16年発行であることから, このときそろえられたものである可能性もある。
- ²⁷ 菜の花ライブラリーから確認できる。
「千葉県尋常師範学校蔵書印」: 渡辺辰五郎『裁縫教科書』巻3(1897)(千葉県立中央図書館所蔵, 請求記号:C3759/SA18/3) 菜の花ライブラリー, http://e-library.gprime.jp/lib_pref_chiba/da/detail?tilcod=000000014-CHB601582 (令和4年2月9日閲覧)
「千葉県師範学校蔵書印」: 渡辺辰五郎『裁縫教科書』巻2(1897)(千葉県立中央図書館所蔵, 請求記号:C3759/SA18/2) 菜の花ライブラリー, http://e-library.gprime.jp/lib_pref_chiba/da/detail?tilcod=0000000014-CHB601580 (令和4年2月9日閲覧)
- ²⁸ 後述の, 4-(4)および図11参照。
- ²⁹ 教則7(「数学教授書」, 「物理階梯」, 「物理日記」, 「物理全志」, 「化学日記」, 「初学人身窮理」, 「登高自卑」), 考試1(「初学須知」)。なお, 「考試」とは, 「千葉師範学校定制」所収の「試験法」に規定された入学試験のうち, 「高等考試」を指す。出題教科書のひとつとして「初学須知」の書名が見える。
- ³⁰ 「千葉師範学校教科用図書表」(前掲『千葉県教育史』2, pp. 993-998)
- ³¹ 『筆算摘要』, 『物理全志』, 『幾何新論』, 『羅斯珂氏化学』, 『訓蒙動物学』
- ³² 「千葉師範学校定制」第2章学費・第5条(前掲註15所収)。
- ³³ 小熊吉蔵(1866-1942)は, 明治17年7月に千葉師範学校を卒業すると, 県内の小学校の教員や校長を歴任した人物。明治34(1901)年には抜擢されて君津郡視学となったほか, 明治45(1912)年には吉野村村議員に当選するなど多方面で活躍した。(「千葉県の教育に灯をかかげた人々」編集委員会編『千葉県の教育に灯をかかげた人々』2, 千葉県教育会館維持財団文化事業部(1989), pp. 24-30を参考にした。)
- ³⁴ 千葉県師範学校養気会編『創立六十周年記念誌』, 千葉県師範学校養気会(1935), 回顧六十年 p. 10
- ³⁵ 表紙の番号については, 図3参照。
- ³⁶ 以上, 小池の略歴については, 前掲『千葉県師範学校沿革史』, pp. 67-68, 108-109, 「千葉県の教育に灯をかかげた人々」編集委員会編『千葉県の教育に灯をかかげた人々』1, 千葉県教育会館維持財団文化事業部(1989), pp. 209-212を参考にした。
- ³⁷ 以上, 谷中の略歴については, 前掲『千葉県師範学校沿革史』, pp. 68-70, 109-112, 前掲『千葉県の教育に灯をかかげた人々』1, pp. 347-353を参考にした。
- ³⁸ 以上, 多田の略歴については, 前掲『千葉県師範学校沿革史』, pp. 113-117, 前掲『千葉県の教育に灯をかかげた

- 人々』1, pp. 249-255 を参考にした。
- ³⁹ 小池の回想は、前掲『千葉県師範学校沿革史』, pp. 67-68 によった。
- ⁴⁰ 前掲『千葉県教育史』2, p. 534
- ⁴¹ 前掲『千葉県教育史』2, p. 535
- ⁴² 「千葉師範学校定制」第2章学費・第1条（前掲註15所収）
- ⁴³ 「千葉師範学校定制」第2章学費・第1条および第2条（前掲註15所収）
- ⁴⁴ 前掲『千葉県教育史』2, p. 535
- ⁴⁵ 前掲『千葉県教育史』2, pp. 1009-1010
- ⁴⁶ 前掲『千葉県師範学校沿革史』, p. 117
- ⁴⁷ 斎藤斐章「文学博士三宅米吉先生小伝」（三宅博士古稀祝賀会編『三宅博士古稀祝賀会記念誌』, 三宅博士古稀祝賀会(1929), p. 3)
- ⁴⁸ 前掲「文学博士三宅米吉先生小伝」, p. 4
- ⁴⁹ 前掲『千葉県教育史』2, p. 536
- ⁵⁰ 日本国語大辞典には「炭酸ナトリウムのこと。また、苛性（かせい）ソーダ・重曹（じゅうそう）などを含めていうこともある」とある（『日本国語大辞典』第2版, 第8巻(2001)p. 352）。
- ⁵¹ 前掲『千葉県師範学校沿革史』, p. 110
- ⁵² 前掲『千葉県師範学校沿革史』, p. 108
- ⁵³ 前掲『千葉県師範学校沿革史』, p. 114
- ⁵⁴ 前掲『千葉県教育史』2, p. 534
- ⁵⁵ 静岡県立図書館デジタルライブラリー「温故知新（その2）」https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/data/open/cnt/3/355/1/SZK0004099_20050223170851092.pdf（令和4年2月9日閲覧）に詳しい。
- ⁵⁶ 前掲『千葉県教育史』2, p. 539
- ⁵⁷ なお、明治11年に創立した千葉中学校も、同様に千葉師範学校構内に建てられ（前掲『千葉県教育百年史』1, p. 417-418）、師範学校と兼務する教員が多かった。
- ⁵⁸ 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編 22, 講談社(1965), pp. 571-573 に詳しい。同書によれば、「本書は明治初期の代表的な化学教科書であり、「物理階梯」とともに明治前期を通じて最も広く普及した理科教科書である」（同書, p. 571）とされる。
- ⁵⁹ 図12を見れば、背にラベルが付されていないことがわかる。他の教科書資料は、前述のとおり、背ラベルが付され、そこに「千葉師範」と朱筆されている。
- ⁶⁰ 「羅斯珂氏化学、度量比較表、日本有用木材試験表、出版ノ件」（明治9年3月15日）（「文部省往復」明治9年甲所収）東京大学文書館デジタル・アーカイブで公開されている（<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/document/595fb84f632bd83089b9296996d1f0b8>（令和4年2月9日閲覧））。
- ⁶¹ 前掲註27, 28 参照。
- ⁶² 前掲『千葉県師範学校沿革史』, p. 16
- ⁶³ 樋口雄彦『沼津兵学校の研究』, 吉川弘文館(2007), pp. 583-584
- ⁶⁴ 同前。
- ⁶⁵ 船橋市市史編さん委員会編『船橋市史』史料編7, ぎょうせい(1991), pp. 3-4
- ⁶⁶ 樋口雄彦「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」（『国立歴史民俗博物館研究報告』167, (2012), pp. 143-167）に詳しい。
- ⁶⁷ 前掲「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」, pp. 154-155
- ⁶⁸ 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編10, 講談社(1962), p. 662
- ⁶⁹ 前掲「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」, p. 155
- ⁷⁰ 「静岡県駿東郡書記河目俊宗同県駿東郡長ニ被任ノ件」（国立公文書館所蔵, 請求番号: 任 A00187100-005）
- ⁷¹ 両県は同年6月には合併し熊谷県となり、河瀬は引き続き熊谷県の県令となっている。
- ⁷² 前掲「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」, p. 155
- ⁷³ 大平が明治6年4月に熊谷県に赴任しているとすれば、明治6年7月開校の千葉小学校の教員として大平がいたという大東の回想と食い違うことになるが、大平が印旛県の教員養成に関わったことは他の史料からしても確実であると思われるので、大平に教わった時期について大東の記憶違いがあるものと考えられる。
- ⁷⁴ 前掲「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」, p. 155
- ⁷⁵ 前掲『沼津兵学校の研究』, p. 563
- ⁷⁶ 前掲『沼津兵学校の研究』, p. 548
- ⁷⁷ 小倉金之助『数学教育史』, 岩波書店(1933), p. 291 などは、その代表例である。
- ⁷⁸ 前掲『日本教科書大系』近代編10, p. 663
- ⁷⁹ 神津道太郎は第四期資業生（前掲『沼津兵学校の研究』, pp. 590-591）、宮川保全は第七期資業生（同書 pp. 611-612）。
- ⁸⁰ 表3 参照。